



慶應義塾大学ビジネス・スクール

自己臭恐怖で退職に至った技術者

主訴：自分の身体からガスが出ている。くさいので誰とも親密になれない。独りでいるときは臭いがしないが、会社の中で人と会ったり、話をしていると臭ってくる。オーデコロンや整髪料を使っても、臭いがする。周囲の人は私に気を使ってそしらぬ振りをするが、くさいの分かっているはずだ。臭いは、口、肛門、臍など、いたる所から出ている。COが「別に臭わないが・・・」と言うと、「いや実はくさいと聞いていらっしやるでしょう」と言う。こんな状態で会社生活が通けられるのか不安になる。会社を辞めたいが、辞めたらどうして食べてゆけばよいか分からない。 10 15

本人のキャリア：26歳の男性。理科系の大学を出て2年前から大手の電器関連の会社にエンジニアとして勤めている。仕事は、コンピュータを使った設計・開発の仕事。大学卒業と同時にこの会社に採用された。大学では材料関係の研究室に所属。コンピュータを使った実験、シミュレーションの技術が買われ、また指導教授の推薦もあって就職が決まった。 20
仕事は開発部で電器の部品の開発・設計をしている。頭は抜群に明晰で、誰もが一目置く存在。ほとんどの場合はコンピュータに向かって仕事をしているが、時々チームのミーティングがあったり、生産や品質管理など他部門の人との打ち合わせがある。他部門の人との打ち合わせになると特に臭いがひどくなり、その場を逃げ出したくなる。そんな訳で、打ち合わせもそこそこにその場から離れるので、後から打ち合わせどおりになっていない 25
などとの苦情が関係者から来る。そんな連絡ミスから、小さな失敗を繰り返している。

生育歴：本州のさる岬のひなびた漁村で育った。母親（保険外交員）と2歳年下の妹（看護婦）がいる。父親は本人が小学校3年のとき、家を出てそのまま帰らない。後から離縁状が届けられた。父親は同じ県の都市部で別の女性（再婚相手）と暮らしているらしいが、 30
詳しいことは分からない。家では父親のことを話題にするのはタブーとなっていて、そのことについては誰も話さない。母親は、保険の外交をしながら本人と妹を育てた。

このケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールの渡辺直登教授が作成した。ケースに記載されている個人情報については、本人および関係者の尊厳と秘密を保護するため、当事者の了解のもと事実から逸脱しない程度に偽装されている。